

※ これは、平成28年11月、赤羽寿行さんから戦争体験を市職員・平和事業推進委員が聴き取った内容をまとめたものです。

聴き取った内容をそのまま記載していますので、個人の見解が含まれています。

1 前置き

本来なら、戦争体験の話はしたくないし、思い出したくなくて、

1953年に帰国（ひきあげ）して、ずっと話をしてこなかったが、

40年以上経ってから、思い出し、語るようになった。

様々な人が戦争体験を語るが、その思い出し方はそれぞれあると思い、

ただ単純な苦労話や体験話には疑問を感じるので、

僕は、自分の体験を客観的に、あの時代の中の、流れの中の自分の体験を語りたい。

なぜ過酷な体験をしなければならなかったのか、なぜ追い詰められたのか、なぜ戦争がおきたのか、どんな戦争だったのか、として語りたいと思い、

自分なりに、整理し直して、要望されて話すようになったのが、70代になってからだった。それまでは、話をする気になれなかった。

戦争体験を伝えるとか、語り継ぐのは至難だと思う。話をしても、なかなか分かってもらえない。

一時、話し終えると、空虚な感じがしたこともある。

2 尋常小学校～中等学校

生まれたのは、名古屋城近くで、昭和8年に小学校に入学した。

実家は爆撃を受けてしまった。

当時、学生だった僕は“ハルビン”にいたので、家が爆撃を受けたのは帰ってきて知った。

満州から帰ってきたのは、戦後8年の昭和28年3月、

家族は幸い生き残っていて、僕は死んだと思われていた。

小中学校の僕は、何も知らない無知な子どもだったが、

子どもでも、“真実を知る、物事を疑う、批判する力”はとても大事だと思う。

4月1日に、僕らが小学1年生に教わった“パッと散る桜”は、

今でも鮮明に覚えていて、今でもそれは“とれない”。

この教育は、とても“上手”だったし、怖い教育だったと思う。

天皇のために死ぬ、お国のために殉ずると、小さな小学生から教え込まれてきた。

“戦争体験”は、空襲や原爆だけではない。それ以前の“戦争教育”もその1つだと思う。

教育勅語は、4年生で読めるようにし、5年生で暗唱、6年生で書かされる。

街では、新聞・ラジオが戦争の雰囲気をもたせる。

軍歌、軍国歌謡は、今でも染みついている。

例えば、“露営の歌”（戦争中に流行った歌で、野宿をしている兵を歌う）

5番か6番まであった。

詩の一部（今でも歌える）：思えば、今日の戦いに 朱に染まってにっこりと
笑って死んだ戦友が、天皇陛下万歳と残した声が
忘れらるうか。

こんな歌を毎日聞けば、それが当たり前になる。

昭和18年、19年、20年は、中学以上は学校ではなく、工場に勤労働員と決まっていた。

昭和18年は週何回か、19年になると毎日となった。

学徒出陣で大学生 勤労働員で働いた中学生、国民学校（小学校）の生徒と世代により3段階に分かれるので、戦争体験も3段階で、受け止め方、思い出し方が違うと思う。

勤労働員では、各都道府県からたくさんの学生が名古屋に来ていた。爆撃でたくさんの人が亡くなった。

工場で気合いを入れていたとき、皆の前で演説した（させられた）ことがあったが、当時、どれだけ本気になって演説したのか？

戦後は、恥ずかしくて、同窓会に出たことがなく、軽率な自分の言葉が恥ずかしいと思う。

3 大学受験（ハルビン学院）

1945年 2月末に名古屋を出た。

実は、満州へ行く決意も、なかなか決まらなかった。

国文学（古典）をやりたかったが、ロシア文学も悪くないと思っていて、葛藤もあり、自分の進路についていろいろ悩んでいた。

受験当時は、戦争に負けるとは思ってなくて、

普通に、お国のために殉ずると考えていた。“人生25年”と思い込んでいた。

中学の時には、既に勤労働員があったから、大同製鋼に毎日通っていた。

同級生は次々と様々な進路（理系又は軍隊）に進んでいった。

当時は、既に徴兵猶予は廃止されていて学徒出陣だったので、

人はいつか、死ぬ（人生25年）。その間は勉強したいと思った。

受験当時、まだ、満州なら文系の学問ができると知って、京都大学で試験があり、口頭試問で合格した。

親は反対し、先生も反対した。

当時、既に出兵にも応援などは禁止されていたのに、友達がコンコースで旗を振って校歌、応援歌を歌ってくれた。当時の女性は、見送りなんかしたら叱られてしまうのに、コンコースの柱の陰で見送ってくれた幼なじみ（女性）もいて、後に僕の妻（5年前に亡くなった）となった。

帰ってきたとき、まだ1人とは思わなかった。8年間、よく待っていてくれたと思う。

また、友人は、理系の大学を辞めて、特攻兵に志願したが、死なずに帰ってきて、作家“城山三郎”となった。お互いに生きてたたと再会に喜んだ。

ハルビン出発前、中学へ別れに出向いた際、年老いた先生が“赤羽、死ぬなよ”と言ってくれ、敗戦後、中国でのひどい境遇の中で、先生の言葉を思い出した。

あの当時から、生きていくことの大事さ、困難さを感じている。

ハルビンには大きな川が流れている。行く先はアムール川で、先は、日本海、祖国日本につながる。この川の流れの向こうに日本があると、泣いた。

音信はなく、いつ帰れるか分からないと思った。

3-1 敗戦～日本人民会難民収容所

昭和20年12月から1、2月まで“ハルビン”にいた。

（※ハルビン：当時300万以上の都市、満州には他にも日本人の難民収容所があった。

当時、満州にいた日本人は十数万人と思う。）

“敗戦”とは、国が敗れることだ。異国で敗戦を迎えるのは本当に惨めで、悲惨だ。

今まで、国が守ってくれたものが、敗戦すると誰も守ってくれなくなる。十数万人いた在留日

本人は、その異国の地に何の手立てもなく放り出されることになった。

放り出された日本人は、互いに助け合った。それが、後に“日本人民会”となり、日本人民会難民収容所を運営した。

難民収容所には行き先がない人（追い出された人）がたくさんいた。

僕は当時学生（満州国立大学ハルビン学院 ロシア語専門）だったが、

“満州国”の崩壊とともに大学もなくなった。

国が減びるのは滅多に見られるものではないが、関わるものではない。

3-2 日本人民会難民収容所での生活

収容所には限りがあったが、行く先のない人、開拓難民、女、こども、老人、兵士、様々な人がいた。

一番惨めだったのは、満蒙開拓難民（※注1）で、着ているもの全てを、はぎ取られ、“倭”を身につけた女性、親・兄弟が目の前で暴徒に襲われて殺される。その恐怖で髪の毛が真っ白になった12歳ぐらいの女の子等、孤児は何十人といた。

以前、テレビで、似たようなドラマがあったり、

見たくないと思ったのに、たまたま見てしまい、難民収容所のことを思い出した。

僕は、孤児と一緒に暮らしていて、孤児達は食べるために働かなければならないので、

僕は、いつのまにか子ども達の世話係になっていた。もちろん、一緒に働いた。

10歳ぐらいの男の子を長男として、女の子、男の子の3人兄弟がいて、

少ない食べ物を分け合って食べていたことを今でも鮮明に覚えている。

あのことを思い出すと、今でも涙が出る。

※注1

土地のない貧しい日本の小作人は、満州へ行くように日本政府による宣伝があった。

彼らは満州に来て、日本の何倍もの土地を与えられ、裕福になった。

しかし、もともと中国人が作ってきた農地を日本政府が追い出して、与えた土地だった。

それは、国家権力によって奪った土地であり、中国の農民の恨みをかうことになる。

後に敗戦すると、その抑えられた憎しみや恨みは、日本人へ向けて爆発する。

追われた日本人は、夜中に数100Kmを歩き、やっとの思いで都会の難民収容所にたどり着いた。

命からがら、暴力や反抗に逃げ惑い、都会へ逃げてきた。

当時の日本人男性は、全て兵士となっていたから、残っていたのは、女性・子ども・老人だけだ。

4 日本人狩り

僕は、満州に親戚がいないかわりに身軽だった。

1945年8月にソ連軍が満州にやってきた。

引き上げは、1946年4月か5月だったと思う。そう長くはいなかった。

ソ連軍の暴行・略奪などは、いろいろな人が話をしてきたが、

僕も見たし、日本人狩りにも遭遇し、ハルビンから300~400km先にある牡丹江に送られ、生活をした（ソ連軍の捕虜収容所ではない。）。

そこでは、1日に握りこぶしぐらいの固いパンを1つしか与えられないし、いろいろな労働を

させられた。だから、腹が減る。周囲にはもともとの農民がいたので売りに来ることもあった。
(僕も含めて) お金のない人は、夜中になると、忍び出て、近くの畑のじゃがいもなどを盗んで、生でかじって餓えをしのいでいた。

シベリア抑留は、軍人・軍属のみが対象だ。

それも、ポツダム宣言は、武装解除された兵士は民間人として扱うとなっていた。

当時、スターリンも日本兵を抑留することは考えていなかったはずだ。

しかし、満州を占領したソ連軍代表と、東京の大本営(政府)が話し合いを行った際、“ソ連軍が必要なら、日本兵を使っても良い”、“民間人も帰さなくてもよい(帰ってこなくてよい)”と大本営が言ったと聞いた。これで、日本の軍隊60万人がシベリアに連れ去られた。いわゆる“棄民政策”だ。シベリア抑留は、日本側にも問題があると思う。

例えば、ソ連が日ソ中立条約を破って侵略してきたという。

1945年の段階で、ソ連が条約を破棄する通知を行った。

しかし、実は、日本にもソ連へ攻め入ることをやってきた経過がある。

それでも、スターリンは非道なことをしたと思う。

5 牡丹江からハルビンに戻る

8月～10月(1ヶ月半ぐらい)で牡丹江からハルビンに戻った。

1946年8月 残された日本人が、日本に帰ることが決まり(第1次集団帰国)、

このとき、ほとんどの日本人は、帰って来ることができたが、

僕は日本に帰れず、強制的に中共軍隊の一部(朝鮮義勇軍)に配属された。

日本人で配属されたのは、他10数人の若者だと思う。だから、僕たちの中では、まだ戦争が終わっていなかった。ただ、日本人兵士は戦闘(最前線)には出なかった。

後方部隊(運搬、負傷者の治療など)が主な任務だった。義勇軍には1年ぐらいいたと思う。

周りは朝鮮人だが、当時は日本語ができる人が多かった。

朝鮮義勇軍では、仕事のないときは、部隊の中に政治指導員がいて、話をする。

でも、政治的な思想を押しつけることはなかった。

当時、僕たちは、既に朝鮮人兵士と同じ暮らしをしていた。

旧日本総領事館(司令部)で、義勇軍の司令官に僕たち日本があいさつに行ったことがある。

司令部には、大きな本棚があり、本棚には日本語の本がほとんどだった。

指導員が、本を貸してくれた。河上肇の「第2貧乏物語」などで、

“義勇軍は戦いながら学ぶ”と言われ、

僕にとっては、初めてで、触れたことのない“新しい考え方”で衝撃だった。

それは、小学校、中等学校と、天皇中心の教育を受けてきて、

教科書では、今で言う道徳(修身書)が、どの科目よりも大事であり、

小1が最初に覚える・習う言葉は“天皇陛下万歳”、

小4になると教育勅語を何しろ読まされていたから、とても衝撃的であった。

さて、朝鮮義勇軍としても、まさか、日本人が任務するとは予想していなかったと思う。

日本が植民地にしたのは1910年からで、その後36年間、日本の植民地だ。

戦後、僕たちと一緒にいた朝鮮義勇軍は、日本軍と戦ってきた兵士だ。

一緒にいるのはきっと、心安まらなかつただろう。

でも、一緒に暮らして、寝食を共にした。

中には、笑顔を決して見せない人もいた。その人は、家族を日本兵に殺されていた。その時、自分がその家族を殺したのではないのだが、“加害責任”を感じた。

6 除隊して教師になる

1948年ぐらい義勇軍には除隊願いを出して、一般人として住んでいた。

除隊したときに、まだ、日本人が5,000人ぐらいいて（技術者、医師、看護師など）、その子ども達へ教えることを求められ、資格もないのに小学校の教師となった。

当時、校舎といっても、窓枠もない、砂埃が舞うような教室ともいえない粗雑な状態で、僕も、教える力がないし、今まで教えてもらったことも教えられない中で、子ども達に“どうやって生きていくか”を教えるための教科書作りから始めた。

古い教育の思想を捨て、新しい日本の教育を考えながら、僕も勉強しながら、子ども達に教えていた。教師も苦勞の多い教育活動だった。

だから、僕自身、何を教えたらいかが分からないから、ハルビンにいた指導的な人物を頼った。この人物は、共産党関係の人物の影響があって、そういう思想が入ってくる。

“ものの考え方に目を向ける努力”教育の手本はソ連教育だった。当時、中国はソ連から学んでいた。そのまま取り入れることはしなかったが、国交もなく今のような情報（※注2）もなく、的確な教材を用意することは不可能だったので、僕は、“命を大切に、どうやって生きていくか”を考えさせた。ハルビンで、3年ぐらい教師をやった。残り3年ぐらいは、瀋陽の日本人小学校で教師をした。

※注2

情報といえば、1947年1月31日の夜に、1台のラジオ（短波）で日本の放送が聴けたことがある。“2月1日のゼネストをマッカーサーがとめた”

1949年、中華人民共和国ができた。革命の嵐が吹きすさび、毛沢東が建国の宣言をし、お祝いのデモ行進があった。

日本人学校の教育のためにいろいろな雑費は、中国政府がお金をだしてくれていた。今まで敵だった日本人なのに、民族教育を保証してくれた。

今の日本では、彼らのことを良く言う人が少ないと思うが、僕自身、生きることができた＝中国で育ててくれた恩義がある。

あわ、きびの混ざったごはん。当時のあわは、食べられたものではない。

戦争中は、米の飯なんて、考えられなかった。

一番のごちそうはシェンピン（今で言う、チヂミ？）

マントウ：まんじゅう（“あん”はない）

チャオズ：（餃子）

7 帰国

昭和28年3月 第2集団帰国が始まり平穩に秩序よく行われた。

僕もこの時、瀋陽から天津に集まって、半月後、港をでて興安丸（引き揚げ船）で舞鶴港に到着した（3月末）。父が1人で迎えにきて8年ぶりに再開した。

帰国後は教師（小・中・高校）を30年ほどやった。

8 戦争体験を聞くだけではなく、考えてほしい。

なぜ、戦争体験を聞くのか？

聞いたに留まらず、戦争をどう考えるか？ 考えてほしい。

戦争の歴史をそのように勉強してほしい。